

賈島の五言律詩「李凝の幽居に題す」

報告：花岡風子

今回のお題は賈島（779～843）という中唐の詩人の五言律詩「李凝の幽居に題す」です。この詩人は、『唐詩選』にいくつか作品が載っているものの、日本では取り立てて有名というほどではありません。しかし、この詩から生まれた「推敲」の二文字を知らない日本人はいませんね。文章を何度も練り直すという意味で使われる「推敲」はこの賈島のエピソードから生まれた言葉なのです。

この律詩の頷聯「鳥は宿る池辺の樹 僧は敲く月下の門」で、作者は「敲く」がよいか「推す」がよいかと思ひ悩み、その二字を口ずさみながら、ノックする動作とプッシュする動作を繰り返していたら、夢中になってお役人様の行列に突っ込んでしまったのです。歩きながら突っ込んだとも、ロバに乗ったまま突っ込んだともいわれています。「無礼者！」とひっ捕らえられて、行列の主人の前に引き出されたところ、その主人は中唐を代表する大詩人、韓愈でした。「この二字のうちどちらが良いと思われませんか？」と賈島が訊ねたところ、韓愈は「それは、「敲」が良かろう」ということで、「敲」に決まったのです。漢字一字の為に我を忘れて苦吟する賈島の姿に心打たれた韓愈は、さっそく彼を弟子にしたということです。

「まあ、これが本当の話だとすると、まるで劇画みたいですねえ」と植田先生。確かに劇画のシーンが眼に浮かびそうな大物との出会

いです。行列に突っ込んだことでお咎めを受けなかったばかりか、作品の仕上げのアドバイスまでもらい、しかも弟子にしてもらえる。賈島にとっては人生で一度あるかないかの「運命がひっくり返る」瞬間だったことでしょう。しかも、この時生まれた「推敲」という二文字が千年の時を超えて、隣国日本で知らない人がいないほどの言葉になっているのですから。誠に「縁は異なるもの」ですね。

「ところで皆さんはどっちがいいと思われませんか？ ギイーっという音と、コンコンという音」、と植田先生。月明かりの静寂の中で、木の扉が立てる音がこの詩を引き立てているのですね。月明かりの下、夜のしじまに響くのはギイーっという不気味な音ではなく、澄んだ夜空にこだまするコンコンという音の方が、確かに趣があるように感じられます。

賈島は、家が貧しく、何度も科擧に失敗した後お坊さんになっていましたので、「僧は敲く月下の門」の僧というのは、賈島自身のことを指すと思われまふ。但しこの解釈には異説もあります。

韓愈の弟子になった賈島は、韓愈の推薦によって地方役人になれたそうです。「この人は何度も科擧の試験を受けたけれど合格できなくてね、ノンキャリアの地方役人にはなれたけど、小さな役職で、しかも新たな任務に就く前に病気にかかり人生終わったという、どことなくサエない詩人ですね。先月取り上げた

孟浩然もタイミングの悪い人でしたけど、賈島さんもチョットねえ」。

植田先生にかかると千古の詩人も一気に身近な人になってしまいます。それに、いつも詩人の名前にさん付けなさらぬのに、今回は終始「カシマさん」なんて仰るので、いつに増して、その辺にいらっしゃるおじさまに思えてきます。

「まあ、サエない詩人ですけど、千年後に名を残しているんだから、希望の星とも言えますかね」。

tí lǐ níng yōu jū
題 李 凝 幽 居
jiǎ dǎo
賈 島

xián jū shǎo lín bìng
閑 居 少 邻 并

cǎo jìng rù huāng yuán
草 径 入 荒 園

niǎo sù chí biān shù
鳥 宿 池 边 樹

sēng qiāo yuè xià mén
僧 敲 月 下 門

guò qiáo fēn yě sè
过 桥 分 野 色

yí shí dòng yún gēn
移 石 动 云 根

zàn qù huán lái cǐ
暂 去 还 来 此

yōu qī bù fù yán
幽 期 不 负 言

かんきよりんべい
閑居隣并少なく

そうけいこうえん
草径荒園に入る

やど ちへん じゅ
鳥は宿る池辺の樹

たた げつ か
僧は敲く月下の門

す やしよく
橋を過ぐれば、野色を分かち

いわ うんこん
石を移して雲根動く

しばら ま ここ
暫く去って環た此に来たらん

ゆう きげん そむ
幽期言に負かず

(隣近所に家一軒もない静かな佇まい。
草茫々の小道が荒れた庭へとつづいている。

鳥は池辺の樹に眠り

僧(私?)は月下の門をたたく。

橋を過ぎるともう辺りの趣が違っている。

じっと雲を見ていると、その根元になっ
ている石が動いているみたいだ。

ここはひとまず立ち去って又来ることに
しよう、と、心ひそかに誓いながら私は帰
途に就いた。)

頸聯では、「雲根」という表現が出てきますが、古代中国では、岩山から雲が生まれているという観念があったそうです。確かに黄山や張家口などの幻想的な岩山の風景では、まるで山からもくもくと雲が湧き上がっているように見えなくもありません。「じっと雲を見ていると、その根元になっている石が動いているみたいだ。ということなんですかね。自分が山道を歩いているから、その山が動いているようだと言いたいのか、本当のところは賈島さんに直接聞いてみないとよく分かりませんねえ。いずれあの世に行ったら聞いてみたいと思いますけどね」。

植田先生はいつもこんなにユーモラス。あの世に行くことも何だか楽しみな旅のようです。「この詩は難解だし、全く違った解釈がいくつもあります。まあ、好きか嫌いかわかると、私は苦手の方ですけどねえ」のコメントには一同失笑してしまいました。

「今どきこういう生活は流行らないですね。働いてナンボの世界ですからね。詩の題名にある李凝さんは、一貫して隠居生活に徹している人、賈島さんは、そんな李凝さんに憧れつつ、引きこもってみたり、お坊さんになってみたり、受験に何度も挑戦してみたり、ノンキャリアのお役所務めをしてみたり、フラフラと現代人と変わらないような気持ちをもっていたんですね。それでも詩作に関しては、この道一筋で名を千載に残しました。ブレない根性とブレる心のせめぎ合いと言いますかね。そのコントラストがまた面白いですね」と今日も植田先生のユーモアが随所に炸裂した講義でした。

「ブレない」がカッコ良い生き方のキーワードみたいな昨今。ブレない人というのは何か

をきっぱり捨てている潔い人。ブレる人というのは、どっちかを手放すことができなくて、どっちつかずなんですよ。アラフォー女子もどっちかと言うとサエない詩人の賈島さん側です。でもね、年とともに培った厚かましきで、エイやと居直ってカシマさんに本音トーク。

「そんな悟った人になれないよね。出世と隠居、どっちの生き方もカッコよく見えるよね？ その周りをウロウロして、ブレまくって、そりゃカッコ悪いかもしれないけど、それもナマの人生じゃないの。ねっ？ カシマさん」。

ところでカシマさん、あなたは本当にリギョウさんに会えたのですか？ 会えないまま引き返したのですか？ それとも、そんなことはどうでもよかったのですか？……。